

インタビュー

永世棋聖 米長 邦雄氏に聞く

不測の世界を読む

これまで小誌では社会調査に関する専門的な記事を掲載していましたが、今後はその殻を破って広く「知ること・調べること」に関する話を紹介していきたいと思えます。

今回は、50代で名人のタイトルを獲得した永世棋聖 米長邦雄氏にお話を伺いました。

聞き手は編集担当の氏家豊です。

定跡はデータである

——— 将棋には定跡というものがありますね。私のような素人は、定跡どおりに指すのが正解で、それをどれくらいよく知っているかが勝負のポイントだと思っていますが、どうなのでしょう。

米 長 将棋を覚えはじめた人にとっては、定跡を知ることは上達のために必要なことです。しかし、プロの世界では、定跡だけで勝負がつくことはあり得ないことです。お互いに定跡を知っているわけですから、その定跡どおりに指し、わかりきっている勝負をしようなんて者は一人もいません。私が素人相手に将棋を指すなら定跡で十分だが、プロが相手ではそうはいかない。

定跡というのはデータなんです。今まで先人がいろいろなデータを積み上げてきて、その結果、定跡というものが生まれたわけです。これは、動かぬものというふうに考えられています。たしかに、定跡という字は定まった跡と書きますから、動かぬもの、誰から見ても「正解」だというふうに思われるでしょう。しかし、実際の勝負では、定跡は単に参考で

しかないんです。

——— こういう場合はこう指すという決まりごとだと思っていましたが、そういうものではないのですね。

米 長 世の中には変わるものと変わらないものがあり、さらに、変わらないものにもずっと変わらないものと、ある程度の期間変わらないものがありますね。定跡といっても普遍ではなく、その中でそれしかないというものと新たな展開をするものがあるんです。それを見定める力が直観であり実力なんです。

——— 多くのデータが積み重ねられて定跡が作られるということは、今日の定跡が最も整備されたものであるということになりますか。

米 長 理屈ではそうなるかもしれませんが、実際はそうではないのです。現に、今日一番よいと思われる将棋の定跡は30年前から40年前のものに戻りました。今から20年くらい前から、将棋は先手必勝であろうという前提があった。そこで、先手と後手の勝率をみたところ、先手の勝率は54%だったんです。将

棋は先手、後手に関係なく強いものが勝つのですが、序盤の研究がなされ、先手と後手の勝率が54対46にまでなったわけです。15年くらい前ですがね。その時、この割合が60対40くらいまで開いていくだろうと大方が予想したが、私だけ全く逆の予想をした。将棋はそんなに甘い浅いものではないと公言したのです。果たして、それ以降は先手勝利の割合がどんどん落ちてきた。新しい定跡、いろんな手法を試みた結果、将棋というものがなんだかわからなくなってきたのです。

————— 定跡とか必勝法とかでは到達できないのが将棋だということですか。

米 長 それだけ将棋の奥深さが見えてきたということでしょうね。

————— 定跡がデータの積み重ねであれば、データが数多くあればあるほど定跡は完備されてくると思ってしまいますが、そういうわけではないんですか。

変えないことが罪になる

米 長 ちょっと話を変えて、例えば、官公庁のことを考えてみましょうか。ここでは、前任者のことを踏襲することが大切なんです。なぜなら、ここでは失点をしないことが重要なんです。失点をしないで及第点を取るのがここでの鉄則なんです。これに対して、失点覚悟で大量得点を狙うというのが勝負師なんです。役人はそういうことをしてはいけないというのが常識でしたが、どうもそれではいまの社会を切り抜けられない、と思われてきたのではないのでしょうか。つまり、長い間たまってきた垢を落としたいという気持ちになってきた。そのための方法としては「政府のスリム化」と「地方分権」というものが考えられていますが、「地方分権」というのは、国に対してもうあなたは結構ですよ、他の人

にやってもらいますよということなんですね。そうすると、新たにその仕事を受ける人は白紙の状態です。事に当ることになります。そこでまた紆余曲折を経て、新しい定跡手順ができることになります。

————— 今までの定跡を白紙に戻して、新たな定跡づくりをするということですか。

米 長 そして、定跡ができると再びこの定跡が幅を利かせてその踏襲が行われてくる。それはまたマズイわけです。では、どうすればよいか。そこでまた、権限の移譲が行われるべきなんです。川の水が淀んでくるのを避けるためには常に流れていなければならないということです。

————— どこかの知事さんが言っているように定跡の弁証法というものです。

米 長 そういえば、東京都の知事と長野県の知事は、その手法は違っていても、共通しているのは「変えてもらいたい」という支持者の声なんです。このような世論の中では、従来の「変えないことの大切さ」ではなく「変えないことは罪になる」という発想が生まれるんです。

今までは税金を納める者と使う者の関係は、ちょうど素人とプロのような関係でしたが、今は納税者も賢くなってきて、プロの定跡が通用しなくなってきた。

————— たしかに、情報公開を通して、行政も次第に庶民のものになってきましたからね。

米 長 情報、情報とありがたがるが、私は情報は20世紀に出した最後のゴミだと思っています。本当に役立つ情報がどれだけあるか。無駄な情報、有害な情報が氾濫してますね。

————— おっしゃるとおりです。

米 長 噂話しや作弄的な情報が巷に氾濫しているでしょう。そういう情報が日常生活の

中で闊歩しています。いまや、世の中の動きはこの種の情報によって決まるという感さがあります。そういうものは個人の思惑で作られた情報ですから、真の情報とはいえません。

そういう意味で、私は、将来、新聞というのは経営が成り立たなくなるのではないかと予想しています。なぜなら、以前は記者が自らの足を使って、額に汗して情報を集めていた。それが今は、記者会見を頼りにしすぎて、ひどいものになると「なぜそれを記者会見で話してくれなかったのか」などというのがある。政治家の話をもそのまま伝えても、それには裏があるということを当の国民がよく知っているのですから、新聞というものはそのうち読まれなくなるだろうと思いますよ。真実を伝えるという使命を新聞は忘れないで欲しい。

——— 真の情報を集めるのも、知らせるのも大変な仕事ですが、その情報を得ようとするのもまた大変だという、そういう世の中になってきましたね。ところで、プロは定跡の手は指さないとおっしゃいましたが、定跡を超えた手というのはどのようにして捻り出されるのですか。

デジタルの究極は人間の感性

米 長 まず盤上で勝負をしているとき、その場で捻り出します。考えるというよりも直観、ヒラメキですね。考えるのはその第一感のヒラメキが正しいかどうかにか時間を費やしているんです。思考の前に直観がある。デジタルの前にアナログがある。真実の情報の積み重ねが定跡といっても、真実というのは時代によって変わります。定跡からその後の展開を読み取る直観と予感、これが実力になる。

——— 定跡からその後の展開を読むという

のは至難の技のように聞こえるんですが。

米 長 その至難の技を使うことが勝負では必要ですし、世の中を乗り切っていくうえでそれはいたる所で要求されていることではないですか。例えば、会社の経営者を考えてみてください。物を売って商売しようとするとき、大成する経営者はいい物を作るよりもユーザーが喜ぶものを作ることを心がけます。ユーザーが喜ぶのはどっちかを見定めることが大切なんです。更に、それがどれくらい長続きするかを見定めることも大切です。アイデアが当たって、物が売れる見込みが立てば、その後の流れを読むのは自然にわかる。そこで何をすべきかも自明となる。しかし、そこで打ち立てた新定跡が通用する期間はどれくらいか。それを見込むことが更に重要なんです。当てることとともに、当たった後にいつ撤退するかを読むことが必要になってくるんです。当てることもしない、当てても撤退する時期を読まない、こういう経営者は必ず失敗します。

——— なるほど、先を読むというのは、先の先まで読むことなんですね。将棋の世界では、その「読み」の鋭さというのも時代を経るごとに鍛えられていくものなんでしょうか。
米 長 いま30代の人が、50年前に生まれた人が自分達と同じ年代の頃と勝負したらどうなるかと考え、序盤の研究をしてみたんです。そこで、古いものは全く通用しないのかと思ったが、やってみたらその時代のものが一番良いということになった。いまのところは、ですけどね。そして、それを復活させた藤井というのに羽生は竜王戦で勝てなかった。いってみれば、大山康晴の頃のLP(レコード)が降ってきたということになる。そっちの方が音がいいということです。このデジタル時代にですよ。コンピュータで表せない高

音が出る、ということになるのかな。

————— それはまた、将棋界のミステリーですね。

米 長 駒の動かし方に、コンピュータでは追いつけない、デジタルが到達し得ない究極のアナログが垣間見える、といったところですか。

————— アナログがデジタルを凌駕する世界ですか。凄まじいですね。ところで、先生もホームページを開設されてますね。デジタルを多に利用されている。

米 長 私のホームページは目いっぱいアナログなホームページです。声が聞こえ、写真があって、文字が多く、見ていて疲れない。アナログな人間が話したことを、デジタルが処理して、更にそれをアナログである人間が見たり聞いたりしているわけですから。そういえば、ソニーの出井さんが「デジタルの究極は人間の五感である」と言っていました。まさに同感ですね。ただ、コンピュータは有用ですし、若い人の間ではかなり高いレベルの利用がされているのは事実です。

ITの先は

————— 伝統的と思われた将棋の世界でこれほどまで最新技術が駆使されているというのは驚きでしたが、考えてみれば、デジタルといっても所詮ツール(道具)なので、複雑な思考回路をより鮮明に記録しようという意図がある以上、当然の成り行きなのでしょうね。

そうなると、調査業界がデジタル化の波に乗るのも当然ですね。われわれも、調査員が対象者宅を訪問して、直接意見を聞いてくるという方法が主流ですが、いつの頃からか電話による調査が行われるようになり、今ではインターネットによる調査が行われています。

米 長 インターネットはたしかに便利だけど、弊害はないのだろうかと考えてしまいますね。アメリカがインターネットを開発して世界中に広がっていますが、これをよくWEBとつけたものだと感心しています。もちろん情報がクモの巣のように広がるという、見かけ上の意味なんだろうけど、私はどうしても「クモの巣」の意味を深読みしてしまうんです。

————— どういう意味に思われるんですか。

米 長 クモの巣は花も蝶もダメにする、という意味です。日本はIT革命などといって、バラ色の面だけ強調しているけど、はたしてどうなんだろうかとね。どうも、マウスをクリックして情報を集めるという行為、姿勢がわれわれにどれだけ有意義なのか。足で集める情報と比べたら、クリックするだけで得られる情報というのは所詮それだけの情報なのではないだろうか。そして、所詮その程度の情報が情報の主流となっていく。何か変だと思いませんか。この「何かおかしいこと」に気がつかないままで行ってしまいそうな勢いですからね。

————— これでいいのだろうか。なんかおかしいんじゃないかという疑問を常に感じながら、その疑問を振り払って、とにかく時流に乗り遅れないようにしようとしてきた姿がそのまま続いているんでしょうか。

米 長 これでいいのかなという、それが何か分からないけど、それが流れの先にあると思う。先ほど話したように、将棋の世界では15年前にデジタルの絶対的優位性が崩れてしまった。怪奇小説風といえば、大山康晴、木村義雄、升田幸三の霊が出てきてデジタルというものを取り囲んでしまった。これは、しかし、またデジタルが巻き返し、その繰り返しになるだろうと思いますよ。ただ、今はデ

デジタルが幅を利かせていることは確かです。アナログを残しておかなければいけなかったんだと気がつく前にデジタルの世界にしまおうという人がどこかにいるんでしょうね。誰かの策略というわけではないんですが。

——— ひとつ、「ノウハウ」「これ一冊で」というのがあらゆる分野で広まりましたが、合理的とっていいのかわかりませんが、とにかく「手っ取り早い」が一番になりましたね。

米 長 そこなんです。将棋の世界を見ても、私は思うけど、今の人達が一番強いと思いますよ、これから先も。これからはどんどん便利になって、どんな情報でもいつでも手に入

れることができるようになるでしょうけど、その中で育っていく人達は今の人達に勝てないと思います。

将棋の世界は読み通せない広がりを持っています。不測の世界です。そこでの読みが勝負の明暗を分けるのです。

時代の流れを読み取るということは、これからインターネットが世の中に広く行き回っていく、などという誰でもわかることに気がつくことではなく、その時に社会がどうなるか、人間がどうなるかをあわせて考えるとともにその先のことを考えることです。先を読む。不測の時代を読むということです。

(了)